

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十六年十月十五日
第三種郵便物認可
發行（毎月一回・十五日發行）

（通第三八八号）

次

63.9.12



信仰談話会質疑応答録(二)

近角常観

(1)

第十八願の味わい

福島政雄

(8)

凡骨日誌抄(14)

西元宗助

(11)

業報と本願力

井上善右エ門

(13)

聞光願生

清水凡禿

(15)

念仏詩抄

木村無相

(17)

無碍の一道

花田正夫

(20)

慈光

第三十三卷 第十号

信仰談話会質疑応答録

近 角 常 観

(問者二) 私は何か解決が着くと、着いても何処となく淋しい処があります。例えば父なら父の方も間違っていたと、どうしても淋しみの取れぬ処があります。併し矢張り自分ではお慈悲いだいた境だろうと思いますが……

(答) 信の一念は、自分の方が悪るかったとお慈悲に夜が明けて今までの思いが融けてしまふのであります。それをそんな風に云わず、あなたが慈悲に気がついた自分の心持の上より云わなくては、いかぬ。早く云うと、あなたが親は勝手なもの、親戚は不親切なものと思うて居られたとする。するとその事が、あなたが慈悲をきかされて、相手が悪くてもこちらが許すと変ったか、但しは自分の方が悪るかった、申しわけなかったと変ったか。……

(問者二) その変りが私にありましたのであります。

(答) それではあなたはお慈悲を聴聞してどう変ったか。

(問者二) つまり、自分は人に対して一つも善が出来ぬと……

(答) それでは、向うがああいう態度で来るのもいかなぬが、

やめられぬのが、人間の善悪の心である。偶々善いと思う事があつても、一念それに満足の心を起すなり、忽ちその善が消えてしまつて駄目になります。「ああ実に仏はこの境を哀れと御覧下さるのか。この浅ましい境に引つつき、この暗い心に何時までも喰いついては自分はどうなる」と一念ふと思った時、ハッとにわかにな難くなり、恰も月の明りに夜のあけた如く、今までの闇い心が一時に融けて、今までの心中の争いの様が見えるようになり、ああ実にここじやと、心の境界が一変したのであります。……

(答) あなたは客観的に仰しやる故、氣をつけなくてはならぬのは、あなたは「フツと思つたら有難くなった」と云われる、ここをもひとつ申さねばならぬのであります。如何にもあなたの仰しやる様に、善い善いで煩惱を起し、悪い悪いで煩惱を起す。これは人間の心の裏表で、何時までもそれで善くなれぬ、その者を見捨てぬとの広大の仰せで夜明けさせて貰う処が肝腎なのであります。……

(問者二) イヤそれが私には、その氣のついた一念に、あたかも闇より抜け出たようにすつと心がらくになったのであります。

(答) なつたと言わず、人ごとにせずによく聴きなさい。あなたの言われる様に、善きにつけ悪しきにつけ煩惱を起して苦しんでいる。それを哀れと見をなわして下さる仏が阿弥陀仏にたまします、というこころが肝腎なのであります。それが一寸間違つて、悟りに陥ると、仏のお慈悲

そういう自分にもそれが出来るか、出来ぬ、とですか。
(問者二) そうであります。私はかかる問題に苦しんで、この七月頃から此の学舎に来るようになりました。それはかかる苦しみを解決するのが宗教であるから、何とか苦しい心が直るだろうと思つて参つたのですが、そうしている中にも、どうしても私の計らいが止みません。人と我という考えが止みません。自分の浅ましい心の上に如来のお慈悲は直接そがれているとの事が分りませず、常に人ばかりを眺め、又仏を向うの方に眺めてばかり居ります。それ故、毎日家に帰つてこれだけの事をやろうと思つても、予定通りに行かず、また偶に旨くゆくと、自分はやれたとすぐ誇る心が起ります。又他の者が自分のために何か善い事をしてくれたりすると、すぐ彼奴はしてやつたと思つていふと考へます。つまりこつた考へが毎日続いて、善い悪いという事の連続です。してその善い何何時までも善いでなくして、必ず悪しくなり、又悪が善と変わるためはなく、益益悪しくなるばかりである。ここに於て私は、これが人間誰もの境である。してその境を自分で止められるかというに、どうしても

の方が消えてしまつて、自分の綺麗になつた心だけになる。頂いた今とて、自分の方は悪い心ばかりなのである。それを今も哀れと見ていて下さる広大な仏にたましますのである。この広大な親の前には、如何なる親を捨てる不孝者も捨てられず、又、汝たま／＼心がらくになれば、らくになつたと喜んでゐるが、その喜びも浮いた喜びである。それよく知つてゐる、との遣る瀬ない仏の仰せなのであります。で、この仰せを、それは世間の人の事、他人の事である、自分はすでに心がらくになつてゐる、と人ごとにしてしまわずに、世間が汚れた「湧かし壺」の中の蛆虫なれば、その中に居る自分故、自分も矢張り蛆虫なのである。ここで自分と世間の間に、少しでも分けへだてが生じると、自分だけ横の方に出てしまふていかぬ。この広大の仰せは、今現に自分が善し悪しの計らいに悩んでいる、この自分に向われてそれ程までに言うて下さるお慈悲と知れた一念に、ああ有難いとなり、それで初めて夜が明け、現に苦が無くなるのであります。然るに、ここでややもすると皆が、苦が無くなければ、苦のなくなつた一方しか見ぬからいかぬ。たとえば、我々が人を隔てて苦しんでいる時、相手がそれにもかかわらず、飽くまで親切に自分に対していてくれる。その親切に気がついて「済まなかつた」と分れば、今までの胸の、もやくやは晴れ、苦が無くなる。この時、自

分の苦が無くなったよりも、その疑い隔てていた自分に対して、飽くまでそれ程までして、遂に自分の疑いの取れるまで導いてくれたその人の恩を思わなくてはいかぬのであります。ここは実に他力が悟りにおちる間違いやすい処で『歎異抄』にも、

煩惱具足の身をもて、さとりをひらくということ、この条もてのほかのことに候。云云。

と明示し下されてある。私はよく実験の信仰ということ云います。これを意味を取りそなうて聞かれると、ややもするとこのさとりになる。自分が朝夕念仏称えるでも無くして、「自分はもう分った」と、うっかりすると、悟りにおちる。故にここは、初めのお慈悲に気づいた一念によく気をつけて、初めの一念に、かく浅間しき私を哀れたまう仏にてましますと、我が浅間しき心の上に直に仏のお慈悲を仰ぎ、恵みを頂き、我が身を懺悔して、あやまり果てる処が肝腎であります。

さてかく、お慈悲に夜が明ける方の間違ひになると、悟りにおちるが、又一方、この人生の苦しきを念仏を称えて辛抱するのであるとなると、心のらくになる方の間違ひはないけれども、これでは修養の間違ひに落ちる。そう云われる人の心では、あながち修養の積りではないが、これでは結局念仏称えて我慢することとなり、修養になる。

修養におちるのである。『歎異抄』の明示には、

弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて、念仏申さんと思ひ立つ心のおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。

弥陀の誓願の不思議に助けられまいらせて、往生一定と夜が明けるところで、南無阿弥陀仏々々々と念仏を喜ばせて下さるのである。このお念仏である処で有難いのです。

(問者)「私などはこの浅間しき我々の有様、これを見られて仏様はこの者を哀れと云って下さるのかと、一念気がついた時、何となく今まで来たも、とに帰ったような気がしたのであります。

(答)「イヤもとは外でない。あなたは今迄他力を聞いたもの故、いつでも私がお話する度に、あなたはきつと「分りました」と云われる。しかし私にはちゃんと分っている。

あなたは国が仏教国故、何もかもみんな聞き知って、聞き慣れて居らる。それ故私の処にお出でになって、私が際を立ててお話すると、聞くたびにあなたは驚いて「分りました」と仰しやる故、私はまだ本ものでないと思つていた。処が今度は何か深く感じられたと思うのに、今のお話に罪惡観が出て来なかった。私がこのお慈悲に遇わせて貰うた上から云えば、親は今まで長い間この私にお慈悲を届けよう／＼と、長々お導き下さったのに、今迄長々親にさからつて、このお慈悲を頂かず、今になって漸く気がついて

又、今云うように、あなたにすれば、今一步で悟りの間違ひになり「自分は悟ったが、世の中は悟らぬ者が多くてこまる、如来はそれらの者を長々のお待ちうけ……」というようなことになり易くていかぬのである。それで今現に、あなたが気がついたと云われる一念でも「ああ今まで自分は親を怨み、周囲を怨んで居たが、怨むではなかった。今まで自分の氣に合う者は嬉しく、イヤな顔をする者は皆イヤであつたが、ああこれは皆自分が悪るかつた」と、ここで非常に懺悔心が出るべき処なのである。そこでその一念に自分の方があやまり果てて心がすっかりらくになる故、うっかりするとここで「煩惱具足の身を以てさとりを聞く」と、非常に誤り易い処であります。それも真に実験的に慈悲が頂けてそうなるのならまだよいが、唯お慈悲の筋道だけ聞いて、それが一寸心にはまり「ああ自分はもうこれで悟れた」となる者さえ出来てくる。しまいには「我々は悪いけれど、悪い者を助ける」とのお慈悲であるから、悪くてもよいではないか」ということにさえなつてくるのであります。

また今の修養風の間違ひすると、結局「我々の思いと思ふことは皆はからいである。唯広大なおはからいにまかせ奉りて、我々に於ては念仏称えるのみである」と。このま

「分りました」では相済まぬ。そこで「ああ長々私が悪うございました、申しわけなかった」とあやまり果てて、このお見捨てないお慈悲が有難いとなり、今の『歎異抄』の「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて云々」の言葉が出てきます。これは私が今言わぬとも真に頂かれたのなら必ず後にわかるのであります。ここで今言っておかぬと、今度苦しくなった時は「この間は分ったのだが、もう駄目になった」と、又々ひどく苦しむことになる。なあにこちらは頂いたあと、かて、矢張りものしてみよふのない奴なのである。その者をお見捨てなき仏の親心、この遣る瀬ない御心を知らせて貰うて、安んぜさせて貰うただけにて、私の根性は何処までも仕てみようもないもの、の根性のままなのであります。

又、初めの方にとすると、親の言われるは信後のことを信前に云われるのだから苦しいとなる。然しここで「苦しいけれどこの苦しいのは凡夫の有様故、やむを得ぬ。この苦しき人生故、ここを仏のお慈悲一つで通らせて頂くのであると、かく頭から言つてしまふと、その苦しき処がお慈悲で夜が明けさせて頂けることを知らずに、通つてしまふこととなる。ここは是非一度根底から夜明けさせて貰わなくてはいかぬのであります。一度夜明けさせて貰うたのだと、後から苦しみがきても、お慈悲で追い払われるけれど、こ

こで夜明けしたのでないと、苦しいけれども、これも仏がなさしめ給うて、じつと我慢してここを通るとなつて、これでは何時までたつてもお慈悲に心から夜が明けるといふことがない。今頃の人の信仰々と云うのは、ややもすればこのような人が多いのであります。即ち何も彼も仏が為さしめて下さるのだと云う時は、病氣して着物を着て居られるも御恩なれば、薬が飲めるのも御恩である。結局病氣するのも御恩なれば、死ぬのも御恩と云わねばならぬようになり、何時まで経つても心の夜が明け、お慈悲で「らく」にさせて頂くという処がない。

そうではなく、こちらは病氣で苦しいして見ようのない者なのである。その病氣で死ぬる苦しい有様をかねてしろしめされて、死んだ先きまでもお見捨てないお慈悲と頂かせて貰う時は、ここで病氣で苦しい中からも、このお慈悲一つで充分意を安んじ、今までの苦しいの夜明けさせて貰うことが出来るのである。それなしに、今の為さしめ給うだけになると、沢山借金を抱えて居つて、返えさねばならん／＼と内心苦にしつ／＼、それを黙つてかくしておき、かく沢山金を借して下さつたのも御恩だ／＼と云うようなことになり、これでは「何程悪しくてもお助け／＼」と抑えてみても、本当に安心の出来ることは無いのである。そうではなく、此方は返すべき借金も返されず、どうにもし

て見ようなきその苦しい心中を、それが哀れである、その苦しいのが最もである。それだから其処を救うという親である、このお見捨てなきお慈悲一つを承ると、夜明けさせて貰える故、安心させて貰えるのである。これがないといくらお慈悲／＼と云つても、結局空になつてしまふのであります。

（問者二）その境に行けば、そこが分ると思ひますが……

（答）境は他力では云わぬ、境は禪宗で言うのです。聖人は「信巻」にも、

一念とは斯れ信樂開究の時尅の極促を顯わし、廣大難思の慶心を彰す。

と仰せられ、又一念の時に撰取不捨とも云い、又蓮如上人は、八十通の「御文」ほとんど残らずに、一念の時、八万四千の光明中に撰取し給うと仰せられている故、境と云つてよきそうであるが、真宗では境といふことは全く言わぬ。唯かくの如き我等を、飽くまでお見捨てなきお慈悲一つを、常に喜ぶのでありますから、境と言う言葉は使わぬがよろしい。

（問者二）それで私もあとから考えました。自分は自分が悪いと考えて、その境界に入らせて貰ひ、その有難味を思わぬ。これではおかしいと思ひましたが、心は一向に苦しくなりませぬ……

（答）処が、それが今苦しくなくとも、あとで苦しくなる。

今はらくであつても、今度苦しい時は大苦しみになる。故に今よりその苦の者をお見捨てないお慈悲という処で、頂いて置かねばいかぬのであります。

（問者三）私は只今の御講話で「遺る処は唯仏智不思議」との御一言、信仰も何もなくなり、唯仏智不思議との御一言で、大いにらくにさせて頂きました。なお伺ひたいのは「ねてもさめても南無阿弥陀仏を称える」という事でありませう。私の親が絶えずお念仏申しますのを、私は今まで静坐法のかわり位に思つて居ましたが、御講話で念仏の有難いことを承わり、大体は分つたのですが、なおこれについて少しお聞きたいと思ひます。

（答）御報謝の念仏でもらくにならせて頂けるのであります。先日もかつて学舎に勤めて居て、深くお慈悲を喜び、「求道」に告白を書いた婆やでありますが、その婆やが其後久しく病氣し、先日も病身をもつて訪ねて来ました。私の家に滞在しているうち病氣が急にひどくなり、うめいて如何にも苦しうでしたが、私の顔を見て、「先生、ひと息／＼のお念仏が、このひと息／＼で浄土に参らせて頂くかと思ふようにあります」と云いますから、何気なく私は「そうかい、苦しいだろう、外のことはもうどうでもよい、お念仏一つが有難いな」と言いますと、「ほんとにそうでございます」と、それから南無阿弥陀仏と喜んで居りました。すると二三日の中に、病氣がけろ／＼にらく

になつてしまつた。御恩報謝の念仏なれど、その称える念仏で気づかせて貰うと、かくからりとらくにならせて貰えるのである。然しここに注意すべき事はらくにならせて貰うために称える念仏ではない。ここは「和讃」に

仏法力の不思議には 諸邪業繋さわらねば

弥陀の本弘誓願を 増上縁となづけたり

全く御慈悲の不思議であります。でそれまでも婆やはしきりに念仏称えて居りましたけれど、此時から念仏の称え方が違つてきたと、宅の者も申して居る。この婆やは何か苦しくなると、私の処へ逃げ込んで来るのでありまして、私の処で別に親切にするわけでもありませんが、苦しい時にはやつてくる。この婆やは今初めて気づかせて貰うたのでなく、疾うから非常に喜び、殊に五六年前病氣で死にかけた時など、極樂の音楽が聞えたとき喜んで居たのであります。それ程喜んで居ますのに、何うかすると時々心が苦しくなる。するとまた御報謝の念仏ですぐおのずと気づかせて貰ひらくになるのであります。でこのお慈悲の働きは、全く仏智の不思議で、我々には到底はかられぬ。故にこの不思議の御一言でも、お慈悲の広大なことにも云えるが、我々の罪深くどうにもして見ようのない場合にも云われるのである。現に聖人は先程も云う様に、四方八方詰つてして見ようのない場合に「仏天の御計い」とお示しになつて居る。

かく有難いことにも、して見よう無き時にも仰がせて頂けるのである。

私など余り自分の思う事がバタバタ思い通りに運んで、世界中自分の思うようになるかとさえ思う位の場合がある。私の郷里に一代で非常な資産を作った金持があつて、人が「金の出来る時は、鍬で堀り起す程だったろう」と尋ねたら「それ位のことでこの財産が出来るものか。一時は金の山が背後から砕けてくるかと思つた」と、話したということがある。但实际上に、前後左右バタバタと思つた通りに運ぶ時がある。これは不思議じゃ、全く仏天の御計らしいやと大得意で居ると、今度は具合が悪くなり、人に親切すれば却つてそれを悪くとられ、弁解すれば益々人に疑われ、打ち明けて話せば、いよいよ人が誤解する。全く手も足も動かぬようになつて来る時がある。こうした時にも、我が身の悪しきを懺悔して「仏天の御計らしい、仏智の御不思議」と喜ばせて頂くことが出来るのであります。

故にここは「この世界の上に仏ましまして、この世のあらゆる出来事は、仏がお慈悲の上から為さしめて下さる」という如き迂遠な事でなく、我々この世界の開閉通塞はあつても、それにかかわらず、たとひどんなに塞がった場合に於ても、真にお見捨てなきお慈悲一つがある事を喜ばせて貰うのが、真にお慈悲を喜ぶものであります。

第十八願の味わい

四十八願のうち聖人がどの願を一番大切にされたかと云うことについて申し上げます。勿論第十八願が中心であります。次に第十九、第二十の願を加えて、例の三願をあげねばなりません。それに第十一、十二、十三、十七、二十二、三十三・四・五の願も聖人が大切に御覧になつた願であります。併しその中心は何と云つても第十八願でありますから、その心持で申し上げます。この願文は、

「設い我仏を得んに、十方の衆生、至心に信樂してわが国に生れんと欲し、乃至十念せん、若し生れずば、正覺を取らじ、唯五逆と正法を誹謗せん」とをば除かん」

この願を「至心信樂の願」と聖人が云つて居られます。この願に、至心・信樂・欲生とありますのを、キリスト教の信・愛・望にあてはめて考えたこともあります。信とは信ずる、望とはのぞむ、愛は愛する、という意味で、しっかりと当るものではありませんが、信樂には信、欲生に望が相当しています。然し至心に愛が相当するか、これはすこし問

波岡茂輝氏歌集

燈火の数ませばとて日輪のひかりに光りそふべくもなし
み仏のめぐみたたへん人しあらば七つの宝に代へむとぞ
思ふ

ち、ち、と鳴くより他にすべしらぬ小鳥をかひていとほ
しみけり

来し方の我が足跡を思ほへば行く手の事も大方は知る

一しきり朝毎香を供へたる弥陀をこのごろおろがみまつ
らず

みほとけに香をささげて久々に別れし吾にあへる心地す

一人あらば二人と思へと訓へたまふ祖師の御言葉尊きろ
かも

福島政雄

題であります。

真宗の昔の御講師方は、至心は真実である、信樂は智慧、欲生は慈悲であると講釈せられております。至心はまごころ、真実心、そして信樂は樂の字をぎようと読むときは願うという意味で、信じ願うところであります。弥陀の智慧の光が照り、その光に導かれて、仏の世界を願うようになりますが、実は仏の心が我々にとおつて欲生心がおこるのであります。そこで信樂は仏の智慧の働きが我々にとどいた趣きであり、仏の慈悲を感じたのが欲生であります。至心は信樂と欲生とを包容しているのであります。至心・信樂・欲生と三つに分けてありますが、至心の一つにおさまるので、我々の受ける側からは一心であります。大經の下巻の始めに願成就文がありますが、そこでは唯一心ということになるのであります。私共から云へば、一心帰命の一つですが、仏のお心持を開けば至心・信樂・欲生となるのであります。仏のまことの生命が私に徹して下さる、そこ

に私の心持に信樂のところがひらかれる、それは仏の智慧によるのであります。又私の心持に欲生のところが開かれ、まことの国に生れたいと願う、それには、生れさせてやりたいという仏の慈悲が根源にあるのであります。この様にすべての根源が仏のまことにある、受ける方からは欲生心になるのであります。

天親菩薩の浄土論に「世尊、我一心に尽十方無碍光如来に帰命し奉り、安樂国に生れんと願ず」という有名な言葉がありますが、この「我一心に」が、至心・信樂・欲生を一つにつづめて、我身に一心、と味わうて居られます。

次に大經の下巻の悲化段、五惡段に「一心正念、端身正行」ということを繰り返して説かれているが、これは私共が一心正念となり、端身正行とつとめて行くのではなく、この一心を引きおこして下さる仏のまことが、至心・信樂・欲生の三つの趣きとなって私にひびいて来る、そして一心帰命の心をよびおこして下さるのであります。

この第十八願に「十方衆生」と呼びかけられて、あらゆる衆生を漏らされることがない。そこに至心・信樂・欲生仏のまことの智慧と慈悲がひびいてくる。すると衆生に自然に「乃至十念」「一念乃至十念」で、一声でも十声でも、一生涯でも、仏のまことがひびいて、南無阿彌陀仏となえる、その時に十八願は成就されているのであります。衆

生の心に「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなり」と信じて、念仏申さんと思いたつところのおこる」そこが乃至十念であります。そうなれば如何なる衆生も必ず生れる、「若し生れずは正覚を取らじ」と誓われてあります。四十八願の一つ一つに「正覚を取らじ」とありますが「若し生れずば」は十八願のみにあります。このことは昔の講者は大切に見て居られます。十方衆生、一切の衆生を必ず生れるようにしたい、自分が正覚をとるところと、衆生が生れるということが同時であると誓っていられるのであります。

十八願の最後に「唯五逆と正法を誹謗する者を除かん」とあります。さてこのことについて種々と考えられるのであります。仏は如何なる者をも浄土に生れさせたいと誓われているのに、殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血の五つのひどい罪を犯す者や、正しい教をそしる者は、これだけは取り除くとあります。

ここを昔の講者達は、十八願の「若し生れずは正覚を取らじ」までは阿彌陀仏のお言葉で、「唯除」以下は釈尊の抑止、おさえとどめであると申して居られます。阿彌陀仏は如何なる衆生も生れさせたいと願っていられるが、釈尊はこういう悪いことが世に現れる事はいけない、世に現れぬようにしたいと、釈尊があらかじめそこに落ち入らぬよ

うに抑え止める心でこれを加えられてであると、昔の講者は説かれております。

そこで私として考えさせられるのであります。釈尊は御自身がこの阿彌陀仏の広大な母胎につつまこまれ、その前に帰依して居られるままを大經にひらいて、それを教えられてあります。その釈尊は「光顔巍巍」とひかりかがやき、全身心によろこびがあふれて居られるお姿であります。その釈尊の光顔巍巍としたお姿の中には、如何なる衆生が一番問題になるかと申しますと、悲化段、五惡段に説かれてあるような、この人生に何とも云えぬ罪障が生命の問題となつて居るのであります。この世に五逆の罪を犯すものがあれば、釈尊自身の切なる問題としてお感じになる、それを御自身のことと感じておいでになる、そうしたところから「唯除」のお言葉が出てまいります。

私共から申せば、釈尊がこう仰せになることによって、私共が始めて如何にも自分は五逆の徒でありますと自分の姿が知られてくるのであります。我々は五逆や謗法の罪を犯していても、それを仲々感じていないのであります。親を殺すという問題でも、刃物で子が殺すという表面だけのことでなしに、それよりもっと深い問題であります。自分としては相当に親に尽した心算でいる、それが実は親の心を八つ裂きにしていたのであります。私共の若い時に無

自覚でやったことが、親の心をさんざんに切り裂いたことをあとで思いつきます。このように五逆の重い罪を犯しながらそれを感じていないのが私であります。

謗法もそうでありまして、釈尊がこの言葉を加えられてあることよって始めて、私は五逆、謗法の者かと目をさまされてまいりますと、五逆と謗法の姿が自分の身の上のことと感ずるようになって来ます。この釈尊のお言葉がありまして、十八願がすなおにうけとられるのであります。

四十八願講話より抄出。

小林 一茶の句

月花に四十九年の無駄あるき

これがこのついの住み家か雪五尺

苦の娑婆や花が開けばひらくとて



凡骨日誌抄 (14)

— お盆前後 —

八月に入り、お盆を迎えるころになると、広島原爆被災者の左の歌を想い、心痛む。よみびとは知らず。

息絶えし子に正信偈誦するまも
街は燃えゆく炎のひびき

胸に背に子をかばうまで灼かれたる

母子像の前しばしたたずむ

○ お盆には、鞍馬口の明光寺さん（浅田純雄師住職）にお詣りする。参詣者はご本堂いっぱい、椽側にまで溢れ、また沢山の履物が、いつものことながら、キッチンと揃えられているのを感じる。

最初師の御法話をも承つての予定でありましたが、来客を自宅に待たしであることよって、急いで帰宅して不

の一篇を紹介させていただく。

光輪

「善花は樹のまごころ」

「善豆は草のまごころ」

「善米は稲のねがい」

「善恒沙塵数の諸仏」

「我いちにんを」

「照らしたもう」

「花となり」

「豆となり」

「米となり」

「魚となり」

○

かくてお盆の前後は閑暇にめぐまれて、人と書に親しむことが出来て法楽のひとつでありました。

金子大栄先生の「正信偈誦話」も拝読できた。その中で「我も亦彼の摂取の中に在れども」の善導大師の偈文を讃嘆せられて、「我こそは、彼の摂取の中にありではない。それは善導が己の罪の深き者であることをあらわされしとき、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫と仰せられしことと思ひあわされる。自身の罪惡を省みるときは、「自己は」で

西元宗助

時の御客に応待。ついで東寺の山本秀良師が玄関に見える。キリツとした風貌は、興福寺のかの阿修羅の像を想わせる。拝みたいほど立派になられたと、その剃髪・黒衣の姿を仰ぎ見ながら玄関に坐して講じられる。彼は京都産業大学の卒業生である。苦学して漸く卒業したが、よき師にあり、仏門に入って三年有余になるが、般若心経等をつつしまやかに誦してくれる。

そのほか、前後して洛西・浄住寺（禪宗）の法嗣神原直樹師が、それに娘むこの真実の坊さまも、それぞれ参つてくれて、ありがたい極みでありました。なお、その翌十六日の夕には、大文字の火あかあかと燃えて尽きていくのを、わが家の傍の高野川の橋のたもとにて見送る。命あわれの感、切々であった。

○ 書を整理すると、忘れていたいろんなものを見つけだす。岡崎市の宇野匠一先生の詩画もその一つ。左にその詩

あり、仏の光を仰ぐときには「我も亦」である。そういうところに念仏者の感ずる広い天地があるように思われる。われわれはともすると、罪の深い場合には、「私も」という。それは人もと云いたいのであろう。またみ仏の光を仰ぐときには「私は」と云おうとする。それは、我れ独りのみと、人を斥けようとするところがある」と、思いあたるころ多く、ウウンと肯いて慚愧、合掌する思いでありました。

○

お盆すぎ、千葉から小学校四年と幼稚園上級組の孫二人、東京駅までその母親に見送られて、新幹線で感心にも子供ふたりづれで入浴、わが家は急に賑やかになった。近所の泉川では小魚捕り、わが裏庭では蟬とり、この爺さん、それから二、三日、そのお供にいそがしくなりました。

なおこの八月下旬には、久々に郷里鹿児島に帰って墓参。このたび勧学になられた村上速水師のお寺などに詣り、ついで鹿児島西別院でもお話させていただいて久振りに郷里の師友と親族に会い、志布志の金剛寺さん（暉峻康民住職）にも寄って九月一日ごろ帰宅する予定。よってこのように早々に日誌抄をかきとめる。

業報と本願力

ある女性が訴えられました。私は業の深い女でございます。現在の境遇をかえりみると悲しさがこみあげます。その悲しみを家のものに語りますと、それはあなたの業だといわれます。如何にもそうでしょうが、ではこの私はどうすればよいのでしょうかと涙ながらに語られるのです。貴女の今すべき事は、末徹って心やすい本当に落着けるまで聞法されることの外はないでしょうと言って、語り合いをつづけた次第です。

すべての事一切、業の果報ならぬものはないということ、は深い真理であります。しかし業果というものは、それ自体善でもなければ悪でもありません。ですから「因は是れ善悪、果は是れ無記」と唯識では語られています。一般に「善因善果、悪因悪果」といわれますが、そのとき因の善と果の善とは意味が違ふのです。厳密には「善因樂果、悪因苦果」といわれるべきものです。人間にとって好ましい結果は樂果であり、苦しく悲しい結果は苦果であります。

現在の果報をただ歎き悲しむのではなく、如何にこれを受け取つて、自からを方向づけるかということが大切な用心となつて来るであります。ところが、同時に思われる事は、人間の能力には限界があつて、如何にその境遇を超越しようとしても、その業果が余りにも強大であるときは、その果報に圧倒されて悪道に転落してしまうことも無理からぬ出来事といわねばなりません。ここに道德的努力の限界というものがありません。また歎異抄に「何事も心にまかせたることなれば、往生のために千人殺せといわんにすなはち殺すべし。然れども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり」とあるのも、まさしく人間の日々に直面している事実であります。かかる人間という存在に生れてきたこと自体も、まさしく業果でありまして、この故にこそ我々は弥陀の悲願を聞き本願力に遇いまいらねばならぬ所以があります。歎異抄第九章を抜きますと、「よろこぶべきことをよろこびえぬ」わが心に唯円房は不審をいだき、そのつたないわが心の現実を悲痛の思いをもつて歎き訴えているのです。それはまさしく此の身の果報を悲しんでいる状態といえましょう。ところがそれに対して親鸞聖人は唯円房と同じく、つたない己が内面の果報を縁として、大いなるよろこびの世界を語っております。「よろこぶべきことをよろこば

井上善右工門

しかし樂果が必ずしも善とはいえず、苦果が必ずしも惡といえませんが、たとえば私自身を回顧しても、足かけ八年間、戦争に引き出され、後の四年間はシベリヤで惨憺たる抑留生活を味わいましたが、これは何といつても結構な事とはいへません。まさしく悪業の所感であります。けれども今にして思うと、若しあんな惨めさに遇うことなく、安閑と暮していたら結局温室育ちになつてしまつて、仏法を聞いても觀念の理解に止まるような人間になつていたやもわかりません。貧しい家庭に生れて刻苦勉勵の人となり、富んだ家に生れて懦弱な人間になるような例は多いのです。樂果が必ずしも善果ではなく、苦果が必ずしも惡果とは言えません。だから無記（善でも惡でもない）と言われる所以があります。要は好ましい果報と、嫌わしい苦果とを如何に受け止めるかという点に帰着します。もし過去の業によつて一切が決定づけられてしまふなら宿命論と言わざるをえません。業は決して宿命論ではないのです。だとすれば

ぬにていよいよ往生は一定と思いたまうべきなり……仏かねて知ろしめて煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我がためなりけりと知られていよいよ頼もしくおぼゆるなり……これにつけてこそいよいよ大悲大願はたのもしく往生は決定と存じ候へ」と。何というすばらしく見事な転換であります。つたない果報がそのままに偉大なる輝きを放っているのです。これは全く本願力の何ものにも障えられぬ絶対力が、念仏と共に顕現している姿であります。されば歎異抄七章には「念仏者は無碍の一道なり」と語られ「罪惡も業報を感じる」とあたはず」という雄大な體驗の告白が語られています。

ここに業報を感じることをあたはず」とは因果のことわりが消滅してしまふという意味ではありません。この人間界に生きる以上、業報は嚴然として乱れるものではありませんが、その業報が惡の結果を招来するものとはならず、業報は業報のままにその業縁の作用が転じられ消除されることを示しておられるのです。信巻の現生十種の益に転惡成善の益を語っておられるものに外なりません。そのつたない信徳が総じて「無碍の一道」という壮大な本願力として念仏者に恵まれることに気づかれますと、念仏が如何に広大無比な真実界に私共を生かしめ給うかに驚きと感銘を新たにせしめられます。池山先生の「えらいことだよ、ありがたいことだよ」と嘆じられたことがしみじみ味われます。

聞光願生

仏陀の救いの目あては、ハテ何者であつたろう？ 智者であつたか？ 善人であつたか？ いやいや愚者であつた、悪人であつた。それなのに、智者になり、善人になつたような気がしたときは、救われたような気になり、愚者となり、悪人となつたときは、救いからもれたような気になる、愚かしいことだ。

口伝鈔に曰く「しかるにわが心凡夫げもなくば、さてはわれ凡夫にあらねばこの願にもれやせんと思ふべきによりてなり。然るに吾等が心すでに貪・瞋・痴の三毒、みな同じく具足す。これがためとて起さるる願なれば、往生はその機として必定なるべしとなり」

何回となく読み返し、すればするほど、いよいよ味の深くなるのをおぼえ、且つわが身の幸を喜ばずにはいられない。私はおろかであつたことが、またとなく有難い。私は悪人であつたことがまたとなく有難い。

(昭和十三・二月)

清水凡禿

仏様のみ教えを聞かせていただいている私が、法を汚すような行動をしているのに気づいた時、たまらなく身に寒さを覚える。仏法を世間の人々がいろいろと誹謗しているのを聞けば、おおむね法を誹るのではなく、法を聞いている人を見て、それを通じて法を誹っている。まことに慚愧に堪えない。御消息集(五ノ下)に曰く。

「仏法をば破る人なし。仏法者の破るのを喩えて『獅子の身中の虫の獅子をくらうがごとし』と候えば、念仏者をば仏法者の破りきまたげ候なり、よく／＼心得給うべし」

よくも御親切にかゆいところに手のとどくように御注意して下さったことであるとしみじみ拝まれる。

愚かなもの、罪悪深重なものを救うと聞けば、すぐ自分は愚者であるから大丈夫救われるんだと思ひ、罪悪深重であるから大丈夫救われるんだと思ふ。そして軽い気持ちで救われたように思っている。そうした時、何か問題が起きて

(昭和十三・五月)

自分の愚かさにあいそがつき、罪悪深重なことに泣くときに救いがあやしくなる。末灯鈔に曰く、

「文沙汰してさがしがしき人のまいるたるをは、往生はいかがあらんずらん、と確かに承りき」

さがしがしき人とあれば、学問のある知恵のある人のことなので、自分のことではない、学問もない、知恵もないんだから大丈夫と思うが、そうではない、さがしがしき人とは、愚かであればあるで、それなりに色々とひねくりまわして概念の世界を作っている私のことであつた、と知らされた時、これは油断のならぬことだと思つた。

(昭和十三・六月)

ある先輩が、人間が人間として生きていく根底を極悪深重の凡夫であるという自覚にたたなければ、到底人間が人間として生きてゆけるものではないといわれたが、全くそうであると思う。すべての事件の解決がここから出発しなければ徹底的解決と云われぬ。悩みが何処から生れたのか、よくよく御教えの光に照らされてまる裸身の自分の姿に直面した時に、悩みの正体もわかり、したがって事件は春の雪のように解決するのではあるまいか

(昭和十五・二月)

不問語

日々人の世の種々相に触れるとき、いよいよみ教えの

さとしが身に泌みて有難くなる。友が死んだ悩み、経済の悩み、家庭の悩み、何だかんだと果しがない。

私自身が悩んでいる。その私にお友達が悩みをもっている。はしめの間は、しっかりした人ならともかく、格別悩んでいる自分に問題を持つてくる理由がわからなかった。

しかし今おぼろげながら御聖教を味わさせていただき、聖人が悩まれ、そこに光を仰がれて微笑された御生活に、たまらなくあこがれを持つ自分の心を味つた時、ああこつたなと思つた。

(昭和十四・四月)

さる活花の先生から有難いお話を聞かしていただく。それは花を活けるには、花それぞれの個性を活かしてたてること、それからその材料に聞いてたてること。一体この材料はどんなにたてられ度くしているのか、材料の声を聞いてたてることが大切なことだ。自分がある型にたてようと思ふことは、無理な活け方だとのことであつた。

なるほど、それを日常の生活の上によく味わねばならぬことだと思つた。

(昭和十六・一月)

辞世

大願の舟はあはてる要もなしゆられるままに風のまに／＼

-17-

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

詩抄

香師おおせに

坊主（ぼうず）が

一番がけに堕ち

そのつぎは

聞き分けた同行

じゃぞー

坊主もダレも同じこと

聞き分けただけでは

助からず

聞きつけさせて

助くるとー

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

そのチブサとは

香師おおせに

赤ン坊そだてるに

親の方には分別あれども

赤ン坊の方には分別いらぬ

チブサにとりついてさえ

おれば

よいようにして下される

そのチブサとは

ナムアミダブツ

ただ念仏が

そのチブサ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

無碍の一道

無碍とは「さわることなしとなり。衆生の煩惱悪業に碍えられざるなり」とある。これは転迷開悟された覚者・仏陀の上に拝する徳光であるが、いつも申すように、親は子になくしてはならぬことのために辛苦するように、仏が無碍の光明を放たれるのは、煩惱具足の我々が内に外に碍りばかりで、はてしない苦海に沈みきって浮かぶ瀬のないことを見せなわし、煩惱の氷をとかして菩提の水と転ぜしめようとの大悲心によるのである。

白杵祖山老師が直腸癌で病苦言語に絶する中で、碍りなくすべてを照すみ光は碍りある身の上にこそ照ると、深く信嘗されている。またこのみ光に照護せられて覚悟だに要なきまでにみほとけの育てたまひし恵みとうとし

と、障り多き身をどこどこまでも悲愍して下さる無碍光ましませは、死にざまがどうあろうとも心配のいらぬ身にして頂けたことを随喜していられる。

花田正夫

八十五歳でお亡くなりになった白井成允先生が、御息女に、御遺言として、

「これからの生をお念仏ですごしなさい。かならず道はひらけるから」

と仰ったのも、先生の御生活にいろいろの障りの中で無碍の光益をこうむられて、障りのあるまんま、障りがさわりとなくなつた御体験からこうした遺言があつたと思う。

次に「信心の行者には天神地祇も敬伏し」とある。本願を信じ、御恩が身にしてみても念仏申させて頂く時、順逆両縁ともに自分にとってなくてはならぬ大切な事であつたと転成されて、天地のめぐみを謝せずには居られなくなるのである。そこに念仏者が天をまもり、地をささえて下さった天神地祇に御礼申すと、神祇もまた念仏者をよろこびまもつて下さるのである。

次に「魔界・外道も障碍することなし」とある。魔とは、釈尊の降魔成道の尊容に拝するように、内なる煩惱が造りなすものである。仏陀はそれと戦って追い払われたのではなく、静観されているまんま、魔は自然に和けられて魔性を失って帰順し、よろこびつかえるようになった。迷い心のやまぬ我々も無碍の光照をこうむる時、幽霊の正体を枯尾花と知らされてくるのである。

外道とは、仏道を内道と呼ぶのに対した言葉である。その教理の別は、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三種の道にならなっているか否かによる。外道がさまざまとならないとは、私自身、手当り次第に聖賢の書を読みあさったが私自身が駄目なためについて行けず、最後にこの駄目な私をへだてず、慈悲を注いで下さる弥陀仏の本願に帰し、念仏申すようになった。その時、ふりかえって種々の教を再び読みなすと、それは皆私自身をうつして下さる鏡であつたと知らされ、お蔭で念仏に入らせて下さつたと御礼申すようになった。

障りに外と内とがあるが、内なる障りがとされる時、外なる障りは自然に受けて越えることが出来る、そこに無碍の道も開けるのである。

無碍の道

終りに「罪惡も業報を感じることもあたわず、諸善もおよ

手にせずにはうけるのである」と語られ、歎異抄の第七章を一言一句だけけるようになったとよろこばれた。

清沢満之師は「それは自分の責任であるから死んでお詫びすると云っておれば、生命がいくらあつても足らないし、またそれによって何の解決も得られない。如来にこの如何ともすることの出来ない責任をとっていただいてはじめて道がひらける云々」と言っている。厳密に省みると、私共の力で荷負し得る責任は一つとしてない。かと云つて無責任でよいというのではない。そこに、進むことも退くことも出来ぬ身に「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん！」との大悲のお呼び声一つに支えられて、与えられた道をたどらせていただくことが出来るのである。

先年も或新聞に「瀬戸の海浜にて」と題して、

人の子が貝堀りあらず砂原を平になして海の寄せ來ふ徳富氏の歌が出ておつた。私の伯父で笠岡で医師をしながら念仏を喜んでいた渡辺元一が、六高生だった私に、なかに独り言のように「難波大助が大逆事件をおこしたので、その父が大助の部屋に閉じこもっていたが、とうとう自殺した。」と前置きして、コップを私の前でさしあげて「この中に毒薬をいれて飲むと死なねばならぬが、若しこの毒薬を海に注ぎ入れると、毒が毒のまんまその毒性を失つてしまふ。わしはその海を知っている」とにっこり微笑したこ

ぶことなし」とあることが、実生活の上で非常に大切なことである。

池山先生が或時「慘怛たる悔ひののこせし――のあとかなたもなき無碍の一道」と書かれて「五十過ぎるとどうにも寝つきの悪い夜が時々ある。先日もうそうしたことで、寝られぬままに、過去のことが思い出され、特に既に亡くなられた人々で、あの時若かつたとはいえ申しわけのないことをした、この人にもと、爆撃あとの戦場のように惨怛たるものであつた。そのどうにもならぬ私に、おあたえ下さるお念仏の潮にあらわれて、あとかたもなく転成して下さるのを讃仰した」と語られました。又、先生の還暦を迎えられた正月「たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさもあらばあれ」の一首を示されて「よかれと願つて六十の春秋を重ねたが、苦が軽くなりどころではない、年と共に増すばかりである。そうした中であつて、歳旦若水をつかい、まず仏前に坐して念仏させて頂いた心中を歌にしてみた。さるべき業とは、身にもつ業報で、皆身から出た錯であるが、それを受けて、さもあらばあれと言えたのは、内に念仏のたのもしさがあるからである。ニイチエは苦が来ると、わが望むところとうけ、ゲエテは、待つていたと受けとり、過去への愚痴やら未来への取り越し苦労を軽くすごしていると云うが、念仏者はそれをさもあらばあれと相

とがあつた。忘れ得ぬ話である。

次に「諸善も及ぶことなし」とあるが、善をほしがるのは悪がおそろしいからで、善と悪とは一枚の紙の裏表である。人によって善を欲しがらる律法的傾向の強い者と、悪をおそれる傾向の強い者もあるし、また同じ人でも時に善、時に悪を問題にすることもある。しかし善といい、悪といつてもみな相対五分五分の世界で、仏の御眼にはそれごとたわごとと映っているのである。囲碁の有段者が碁碁の人の対局しているのを見ると、当事者は最善のつもりでも、間違ひばかりでとても見ておられないと聞いた。近角先生はこうした有様を、夜に、ローソク、油灯、電灯が互に光を競い合っているのと同じである、と云われ、一度太陽が光芒を放つと、みな光力を奪われて、同じ明るい中におかれると喻えられた。そこに、われよしの慢心と独善が砕かれ、われあしの卑屈の垢が洗われる。

第一章に「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきがゆえに、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき故に」とあるところをこの章で徹底的に述べられたのである。

あとがき

天高く馬肥える秋、云いならした言葉ながら思い出される頃となりました。本年の夏はとりわけきびしく、夏バテ気味でしたが、漸く疲れもとりもとせました。

○この時、九月十七日付のはがきで木村無相さんからの音信をうけました。……このたびの入院でまた／＼にかと御心配おかけしましたが、ようやく退院してどうにか通院出来るような病状、脚力となりましたので、前回の（日）ごろ退院、帰苑させていただけることになりました。昨十六日、ひさ／＼に和上苑に行つて苑長にあつたためて御礼申上げて来ました。病状は入院前程に回復したようでありましたが、体力はどうも一、二割弱つたようで、ボチボチしか歩けません、どうにか苑生活は出来、通院も出来そうであります。まことにありがたいことでございます云々とありました。

○北米の誌友から、四十八願の大切なものを

わかり易く書いた本を、との注文がありましたので、福島先生の十八願の味わいをおかけ、次回に、十九、二十、十八願の三願転入を称えられたものを転載させていただきます。

○かつて池山先生が「近角さんに信仰上の質問をすると、一口きくと、先の先まで知りつくして、明快に質問者の身になつて答えている、全く宗教的天才といえる人だ」と讃嘆されたことがあつた。今回質疑応答録でその徳香にふれるのであります。

又、東京の樹心社の亀岡さんからの手紙に、近く京都の榊原徳草師の著書が出版出来ると思ひます、とよろこびのたよりがありました。もう師も八十を越えられましたので、信味を書き遺して貰いたいものであります。

京都一道会御案内

時 十月二十五日午後一時

所 京都市西京区山田開町浄住寺

例年通りに、池山先生の忌月を前に、有縁の方々とおためて、お慈育を謝し、念仏讃仰の時をすごしたいと思ひます。御参会お待ちいたします。

〈御案内〉

○毎月第一、第三日曜、午後一時半

一道会例会、一道会館の南隣り

南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目角。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四

毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り又は北山下車。

地下鉄、御器所通り下車

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。

（但し日曜を除く）尾西市三条板倉

名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価 半 年 八〇〇円（送共）
一 年 一六〇〇円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田正夫

電話八二一〇局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂部光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号 四五七